

第2学期終業式式辞（令和7年12月19日）

皆さん、おはようございます。今年はへび年で、へび年生まれの私は還暦を迎えた。干支は十干十二支の組合せ。10と12の最小公倍数60年で暦がひとまわりするので、60歳を「還暦」という。これは皆さんよく知っていると思います。今年は巳年は巳年でも、60年に一度の乙巳（きのとみ）の年でした。今から101年前、「きのえね」の年にオープンした球場は、「きのえね」の漢字を取って甲子園と名付けられました。また、672年の壬申の乱、ほかにも戊辰戦争とか、辛亥革命なども干支由来の名称です。

十二支は、丑三つどきとか、午（うま）の刻が正午、その前後が午前午後など、時刻も表します。『羅生門』では「申の刻下がりから降り出した雨は、いまだに上がるけしきがない。」という表現がありました。

ほかに十二支で表すものは何でしょうか。それは方角です。「子」の方角が北、「午（うま）」の方角が南で、それを結ぶ線が子午線ということも知っていると思います。それでは、全員で巽（たつみ）の方角を手で示してみましょう。辰と巳の間は南東ですから、皆さんから見て右斜め前になると思います。百人一首で「わが庵は 都のたつみ しかぞすむ」という歌があります。「私は都の南東にこのように住んでいる」という意味で、動物の「鹿」が住んでいるという意味ではありませんが、掛言葉として、山奥だから「鹿」も住んでいる、と言いたかったという説もあります。

国語の授業のようになっていますが、最後の質問です。この言葉は、どの小説の誰の言葉でしょうか。「人生は何事をもなさぬにはあまりに長いが、何事かをなすにはあまりに短い、などと口先ばかりの警句を弄しながら、事実は、才能の不足を暴露するかもしれないとの卑怯な危惧と、刻苦をいとう怠惰とが俺のすべてだったのだ。」

これは2年で学習する『山月記』の主人公、李徵の言葉です。詩人になれず虎になつた李徵、人生は長いのか短いのか。私も還暦を過ぎてまた一つ年をとる。若い皆さんも1年の早さを感じる季節だと思います。李徵はこのあと「俺よりもはるかに乏しい才能でありながら、それを専一に磨いたがために、堂々たる詩家となつた者がいくらでもいるのだ。それを思うと、俺は今も胸を灼かれるような悔いを感じる。」と続けます。

刻苦をいとわず、悔いの残らぬように、というのはなかなか難しいことですが、高3の冬は一生一度、もちろん1、2年生の冬も一生一度です。東高みんなで元気に頑張っていきましょう。以上で式辞を終わります。